巻頭言

自然保護とKONCの活性化を考える

千地万造
（KONC理事長・京都橘女子大学）

自然保護というのは大へんむずかしいことだと，近ごろつくづく考えることがあります。というのは，対象となる具体的な自然に対する価値観がひとそれぞれに違うからです。極端な例ですが，以前，私が同志社大学の１・２回生を対象に彼らがどのようなものを〝自然〟として捉えているかをアンケート調査したことがあります。「大文字山」，「御池通りのケヤキ並木」，「金閣寺の庭園」「加茂川のユリカモメ」「北山杉」「郊外の田園」といった具合に例を挙げて，これらの中から，〝自然〟だと思うものを選ばせました。おどろいたことに，御池通りのケヤキ並木を自然だと答えた学生が45％もいました。反面，「加茂川のユリカモメ」は半数近くが自然とは思っていないようでした。

このような自然認識の多様さに加えて，自然に対する価値観もまちまちです。「自然も大切だが，それ以上に人間の生活の方が大事だ」といった考えの人が一般的に非常に多いようです。「自然は必要だ，だから現状をこわしても，そのあとによりよい自然を人工的に(?)造ればよい」という人もいます。

さらに自然保護をむずかしくしている大きな要因は護るべき対象とその価値観が一致しても，保護の手法というか運動のしかたとでもいうものに考え方のくいちがいがあることです。グループＡもグループＢも同じ目的をもちながら，一方のやり方を非難することがありがちです。

たとえば，自然保護といった思想を普及するためにはまず自然にしたしませ，自然を好きにすることが必要だとみんなが言います。ところが，ある人々はその過程で一切の採集行為はさせるべきではないと主張します。また別のひと人は採集という行為も自然を理解する上では大切なんだと主張します。

また自然を護る方策にしても，ある人々は行政のすることは全て悪だと考えているのではないかと思うほどシビアーな意見をもっています。そして他の人々を非難することがよくあります。「行政の方策は最善のものではない」その不備な部分やうっかりすると反対の結果につながる危険性もあることを知ってはいながら，「しかし，一応それをみとめ，それを足がかりとして不備を改めさせよう」といった考えに立つ人々が，この場合非難の対象となっている例がよくあります。

いずれにしても，自然の認識，自然の価値観，自然保護の方策への評価等々が多様化しているのが現実です。その上に立って考えるならば，ちがった考え方を互いに批判し合って，討論によってそれぞれの不備を補い合うことは必要なことだと思います。しかし，互いに非難することからは進歩は期待できそうにありません。不毛の非難はやめるべきでしょう。

戦後の自然保護思想はその時々の社会情勢によって変って来たことはよく御存知の通りです。美しい山河，風景を守るという感覚的心情的保護論からはじまって，日本固有の自然を保護せよという主張，さらに生態系の保護……への進展は，高度経済成長政策による公害の顕在化とからんで，少数の識者の自然保護から一般市民の自然保護へと運動の輪が広がって来たことも十分御存知です。運動の形態も多様化しています。

研究者集団としては日本生態学会が自然保護問題に学問的な側面から取組んで来ました。しかしそれでは生態学者以外の人々は仲間に入っていないわけで，自然保護問題は生態学者以外の自然科学者はもとより，法律，経済社会，文学，芸術，教育の各分野の人々が巾広く集って知恵を出し合い，データを集積して行くことがとりわけ大切だと思います。

自然科学以外の分野からKONCへの参加を求めることを真剣に考えるときが来ていると思います。それに伴って必要とあらば組識も考え直すことも考えられます。会員諸氏の御意見をお聞かせ下さい。